

『ナルニア国年代記物語』における

Non-Human Characters の行動

—*The Horse and His Boy* のジェンダー・ロール—

中嶋 千秋

日本大学大学院総合社会情報研究科

Behavior of Non-Human Characters in *The Chronicles of Narnia*

—Gender Roles of Non-Human Characters in *The Horse and His Boy*—

NAKAJIMA Chiaki

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The Chronicles of Narnia (1950-1956), written by C.S. Lewis (1897-1963), have been very popular among children all over the world for more than 60 years. One of the major features of the series is the presence of Non-Human Characters. Their behavior, especially their speech, indicate the thoughts Lewis intended to convey to the children. In this article, gender roles of the Non-Human Characters in *The Horse and His Boy*, the third book of the chronicle, are analyzed through their behavior in order to clarify Lewis' views of gender.

1. はじめに

C.S.ルイス(Clive Staples Lewis, 1898-1963)は現在の北アイルランド・ベルファスト出身の作家、文学史家、キリスト教弁証家である。『ナルニア国年代記物語』(*The Chronicles of Narnia*, 1950-56)は彼の代表作のひとつであり、唯一の児童向けファンタジー作品である。『ナルニア国年代記物語』は47言語に翻訳され¹、現在もシリーズ映画が作成中であり²、出版後60年を経て今なお世界中の子ども達に愛されている。本邦でも1966年に瀬田貞二訳で岩波書店

より出版されて以来、現在まで版を重ねている³。

『ナルニア国年代記物語』は別世界物語であり、20世紀初頭～中盤のイギリスに設定された現実世界と、〈ナルニア〉⁴と呼ばれる別世界とがパラレルワールドになっている。主に現実世界の少年少女たちが様々なきっかけでナルニア世界に入り込み、そして再び現実世界に戻ってくる〈行きて帰りし物語〉が基本となっている。ナルニア世界には多数のNon-Human Charactersが生息しており、彼らの存在が『ナルニア国年代記物語』を魅力的にしている理由のひとつだと筆者は考える。

では、Non-Human Charactersとはどのような生き物であろうか。まず、ナルニア世界の住人は4つのカテゴリーに分類できる。すなわち

¹ GoodKnight, Glen H., Narnia Translations (Narnia Editions and Translations)
〈http://inklingsfocus.com/translation_index.html〉(2014年12月12日閲覧)

² DAVID MAGEE TO WRITE THE FOURTH NARNIA FILM: THE CHRONICLES OF NARNIA: THE SILVER CHAIR FOR THE MARK GORDON COMPANY AND THE C.S. LEWIS COMPANY (The Chronicles of Narnia Official Website)

〈<https://www.narnia.com/uk/news-extras/narnia-news/>〉
(2014年12月12日閲覧)

³ 本稿での『ナルニア国年代記物語』内の固有名詞の日本語表記は瀬田貞二訳に準ずるが、一部異なるものがある。

⁴ 本稿での〈ナルニア〉表記は、『ナルニア』は『ナルニア国年代記物語』を指し、この作品に登場する別世界を〈ナルニア世界〉、ナルニア世界にある国名を〈ナルニア国〉とする。

- ・人間
- ・通常の動植物
- ・ものいうけもの (Talking Beasts)
- ・神話・想像上の生き物 (魔女、フォーン、バックス、ニンフ、ドワーフ、巨人など)

である。その内、人間以外の3種、〈通常の動植物〉、〈ものいうけもの〉、〈神話・想像上の生き物〉を Non-Human Characters と定義する。

Non-Human Characters は物語に大きく関わり、作品世界を豊かに、且つ唯一無二のものにしている。そこで本稿では、ルイスが子ども達に伝えようとしたジェンダー観が、Non-Human Characters のジェンダー・ロールを通してどのように反映されているかを検証する。

2. ルイスとジェンダー観

2.1 ルイスを巡るジェンダー議論

『ナルニア国年代記物語』がファンタジー作家のプルマン(Philip Pullman, 1946-)らによって男尊女卑、性差別的な表現があると議論の的となっている記事がイギリスのガーディアン紙に掲載されたのが2002年のことである⁵。プルマンは、「ひとりの少女はファッションや異性に興味を持ち始めたので地獄に落とされた」⁶と強く批判した。一方、そのような議論に対して反論したのがAsbury Universityの英文学教授であるブラウン(Devin Brown)である。ブラウン曰く、もし『ナルニア』に女性蔑視的な表現を感じるのであれば、それはルイス自身の信条からではなく、あくまでも人格が完璧ではないキャラクター自身の言動から来るものである。ルイス自身はジェンダー観については立場を明確にはしていない⁷。

⁵ Ezard, J., *Narnia books attacked as racist and sexist* (The Guardian, 2002/6/3) <http://www.theguardian.com/uk/2002/jun/03/gender.hayfestival2002> (2014/11/20 閲覧)

⁶ “One girl was sent to hell because she was getting interested in clothes and boys.” Ibid. 以降、英文和訳は筆者によるもの。

⁷ Brown, D., *Are The Chronicles of Narnia Sexist and Racist?* (the Keynote Address at The 12th Annual Conference of The C. S. Lewis and Inklings Society, Calvin College, March 28, 2009)

<http://www.narniaweb.com/resources-links/are-the-chron>

2.2 ルイスの生き立ち

ルイスは、ヴィクトリア朝(1837-1901)末期に、ベルファストの事務弁護士の父と牧師の家に生まれた母の間に空想好きの次男として誕生した。この時代の女性観は以下のようなものであった。

この時代はまた、家族や男女、親子などの関係についても、家庭を守り、私的な分野を領分とする女性と、公の場で活動し、稼ぎ手となるべき男性というような、非常に明確な役割分担の考え方が定着した時代でもあった。女性は男性に従い、つねに受け身で、控えめで、従順で、自らの意思をもたない、多産な妻であることが理想とされた。ヴィクトリア自身が、夫君アルバート公との家庭生活を、このような理念のモデルとして国民に示した。⁸

また、ルイスは10歳の頃、愛する母を病で失った。その直後に寄宿学校に送られ、とても心細く不安な少年時代を過ごした。アッパーミドルクラス出身であること、時代背景、そして亡き母への思慕が保守的且つ複雑な女性観、家族観を持つに至らせたとし、ても不思議ではない。

では、彼のジェンダー観を、『ナルニア』第5巻⁹『馬と少年』(*The Horse and His Boy*, 1954)の Non-Human Charactersを通して検証することとした。本作を選ぶ理由は、全編を通じて雌雄の Non-Human Characters (ものいう馬) が登場すること、また他作品と比較して登場する Non-Human Characters の数が少なく、ジェンダーの比較対象が明確だからである。

3. 『馬と少年』について

3.1 概要

『馬と少年』は、『ナルニア』シリーズ7作を通じて唯一ナルニア世界だけで物語が完結し、現実世界の人間がナルニア世界に出入りしない作品である。

[icles-of-narnia-sexist-and-racist/](#) (2014/11/20 閲覧)

⁸ 川北稔、『イギリス』(世界の食文化〈17〉)(農山漁村文化協会、2006)、p.202

⁹ 出版順。年代記の時系列順では第3巻に当たる。

粗筋は以下の通りである。

ナルニア国の南に位置するカロールメン国の海辺で暮らす貧しい漁師の息子シャスタ少年は、ある日自宅を訪れたカロールメン貴族と彼の父との話を盗み聞きし、自分が父の実の子ではなく、北方出身の孤児だと知る。貴族に奴隷として売られそうになったシャスタは、貴族の乗っていた馬ブリーと共に北方のナルニア国を目指し逃避行に出る。ブリーも〈ものいう〉〈自由な〉ナルニア国の馬として生まれたが、幼少時に誘拐されてカロールメン国に連れてこられ、それ以来貴族の軍馬として言葉を話せることを隠して生きてきたのであった。途中、親の決めた結婚を嫌って出奔したカロールメン貴族の娘アラヴィスと、ブリーと同じようにナルニア国から誘拐されてきた〈ものいう馬〉フィンに出会い、共に旅を続ける。途中、カロールメンのラバダシュ王子がナルニア国からスーザン女王を奪うため、ナルニア国とその友好国アーケンランド国に大軍勢を率いて攻め込もうとするのを知り、一行は危機を伝えるために北方へと急ぐ。最終的に、シャスタはラバダシュ軍が到着する寸前でアーケンランド国王にその情報を提供することに成功し、更に自分がアーケンランド国の失われた王子であることが判明する。そして、彼の運命の要所要所にナルニア世界の創造主・アスランが関わっていたことを知る。

3.2 『馬と少年』の Non-Human Characters

『馬と少年』¹⁰に登場する主な Non-Human Charactersは以下の通りである。

- ・ブリー (Bree、ものいう馬、牡馬)
- ・フィン (Hwin、ものいう馬、牝馬)
- ・アスラン (Aslan、ものいうライオン、雄)
- ・その他、フォーン、ドワーフ、牡鹿、モグラ、大ガラスなど

本作の特徴として、敵国であるカロールメンにはものいうけものや神話・想像上の生き物は生息しておらず、従って人語を話す Non-Human Characters はすべて主人公シャスタやナルニア国の味方側の者だ

ということである。シリーズの他の6作には、敵味方両方に Non-Human Characters が存在する。

4. 『馬と少年』の Non-Human Characters のジェンダー・ロール

4.1 ジェンダー・ロールについて

続いて、『馬と少年』に登場する Non-Human Characters のジェンダー・ロールを、その言動から検証する。

まず、〈ジェンダー・ロール gender role〉とは、「性別によって社会から期待されたり、自ら表現する役割や行動様式。性別役割。性役割。」と定義される。すなわち、男らしさ、女らしさを示すものである。ルイスは、Non-Human Characters にも前述のヴィクトリア朝の女性観をベースにした価値観を投影したジェンダー・ロールを与えている。本作では特に元軍馬で自惚れやの牡馬ブリーと、貴族の娘の乗馬として過ごして来た牝馬フィンが好対照である。

4.2 ブリーとフィン

4.2.1 ブリーの行動、口調

前述通り、牡馬ブリーは元々ナルニア国のものいう牡馬で、仔馬の頃に誘拐されカロールメンで軍馬として育つ。カロールメンでは人語が話せることは秘密である。彼は自分がカロールメンの他の馬と違い人語が話せること、軍馬としての高い能力を持つこと、自由の国ナルニア出身であることを誇りに思っているが、それが時に鼻持ちならない言動に表れる。

貧しい漁師の養子シャスタと逃避行の旅に出たブリーが、もう一頭の馬と乗り手の存在に気づく。

“There's a Tarkaan¹¹ under the edge of that wood. Not on his war horse — it's too light for that. On a fine blood mare, I should say.” (p.25)

「あの木の下にタルカーンがいる。軍馬には乗っていないな——軍馬にしては素軽すぎる。血統の良い牝馬だろうよ」

¹⁰ 使用テキスト：Lewis, C.S., *The Horse and His Boy*, New York: HarperCollins (1994) 以下頁数のみ記す。また、テキストの和訳も筆者が行った。

¹¹ カロールメン国貴族の名称。男性名詞タルカーン (Tarkaan)、女性名詞タルキーナ (Tarkheena)。

ブリーは足音の軽さから、その馬が良血の牝馬であると断定する。果たしてそれはフィンと貴族の娘アラヴィスであることが判明するが、それはフィンが人語を発したのをブリーが聞き逃さなかったからである。

“Broo-hoo-hah!” he snorted. “Steady there! I heard you, I did. There's no good pretending, Ma'am. I heard you. You're a Talking Horse, a Narnian horse just like me.” (p.30、傍点筆者)

「ブルル、フー、ハー！」彼は鼻を盛大にしました。「そこを動くな！聞きましたよ、聞きましたとも。知らんぷりをしてても無駄ですぞ、お嬢さま。あなたは〈ものいう馬〉でしょう。わたくしめと同じ、ナルニアの馬だ」

これがブリーがはじめてフィンと交わした会話であるが、ブリーはフィンのことを礼儀正しく〈ma'am〉と呼びかける。Oxford Advanced Learner's Dictionaryによれば、ma'amは“(BrE) used when addressing the Queen or senior women officers in the police or army = MADAM”¹² 「(イギリス英語) 女王もしくは警察や軍隊の女性高官に対して用いる」(拙訳)と、イギリス英語では高位の女性に対して使う尊称である。

一方フィンもブリーの問いかけに対して “Too true, sir” (p.31) 「ええ、ほんとうに、その通りでございます」と〈sir〉を使って丁寧に返している。ブリーはその後もフィンに対して、ma'am や madam など丁寧な呼びかけを行っている。

“Why, in that case, what is to prevent us all going together?” said Bree. “I trust, Madam Hwin, you will accept such assistance and protection as I may be able to give you on the journey?” (p.32)

「そのようなことであれば、四人みんなで旅を共にしない手はないですな」とブリー。「フィンお嬢さま、わたくしめが旅のあいだあなた方をお

守りし、お手伝いをするをお許しくさいますでしょう？」

ブリーが、フィンとアラヴィスと一緒に旅しようともちかけるシーンである。ここでは非常に丁寧に礼儀正しく彼女たちの保護役を申し出ている。

そのように丁寧な態度を取ろうとするブリーだが、フィンが自分の意見に反対したり、不備を指摘したりすると明らかに口調が変わる。

結局ものいう馬2頭と少年少女二人が共にナルニア国を目指して逃亡することになり、どうやってカロールメン国の首都タシバーンを見つからずに通過するかを算段を話し合う。ブリーはタシバーン通過後の落ち合う場所を決めるが、通過する手段は提案しない。しかし、通過する手段こそが喫緊の問題であることをフィンに指摘され、

“We'll settle that tomorrow, Ma'am,” said Bree. “Time for a little sleep now.” (p.46)

「お嬢さま、それは明日、かたをつけるとしましょう」とブリーは言いました。「もう、少し寝る時間ですよ」

と結論を先延ばしにしようとする発言をする。ここでも ma'am と呼びかけているが、相手(フィン)を敬っているというよりむしろ自分の不手際を指摘されて、それを誤魔化しているように聞こえる。果たして実際には通過手段はなかなか決まらず、フィンはシャスタの意見に賛同し、奴隷と荷役馬に扮することを提案する。それを聞いたブリーは、

“I should think not, indeed,” said Bree, snorting and letting his ears go ever so little back¹³. (p.47)

「そうは思いませんとも、ええ、実に」とブリーは鼻息荒く、耳をおもいっきり後ろにたおしながら言いました。

と口調は丁寧ながら明らかに憤慨したしぐさを見せ

¹² Oxford Advanced Learners Dictionary, 6th Edition: Oxford University Press (2000)

¹³ 馬が耳を後ろに倒すしぐさは、強い怒りや恐怖を表す。

る。そして更にフィンから泥まみれになり尻尾も不揃いに刈ってしまうべきだと言われ、

“My dear Madam,” said Bree. “Have you pictured to yourself how very disagreeable it would be to arrive in Narnia in *that* condition?” (p.48)

「お嬢さま」ブリーは言いました。「ナルニア国にそーんな姿で入るなんて、想像してごらんなさい。どんなにぶざまなことか！」

と、madamと呼びかけ丁寧な口調ながらも、あからさまに不快感を表している。これは、自分より立場の弱い、保護されるべき対象のはずの牝馬のフィンが、勇壮な軍馬且つ牡馬の自分に対して意見をしたこと、しかもそれがみすばらしい姿で憧れの祖国ナルニアに行くことを意味するものであったのでプライドを大きく傷つけられたからである。従ってここでの “My dear Madam” は、礼儀正しいと言うよりむしろ慇懃無礼に聞こえる。

更にブリーは旅が進むとフィンに対し強い不快感を示すシーンがある。ラバダシ王子率いるカロールメン軍がアーケンランド国・ナルニア国に宣戦布告なしに急襲する計画を知ったブリー達一行がその危機を伝えようと飲まず食わずで先を急ぐ。途中泉を発見し一休みする。一刻も早く先を急ごうとするシャスタ、アラヴィス、フィンに対し、ブリーは疲労を理由に取り合わない。フィンがもし自分たちがまだ隷属状態で、乗り手に出発を強制されている状況であればもう少し力を振り絞れるのではないかと懇願するが、

“I think, Ma'am,” said Bree very crushingly, “that I know a little more about campaigns and forced marches and what a horse can stand than you do.” (p. 136)

「お嬢さま、わたくしめが思うに」ブリーは打ちのめすように言いました。「軍事行動やら強行軍やら、馬がどのくらいがまん強いかなど、わたくしめの方があなたよりもすこしばかりよく存じ上げておりますが」

と、非常に強い口調でフィンを言い負かす。ここでも ma'am と呼びかけているものの、軍馬である自分の方が偉く、フィンを完全に見下した言い方をしている。あたかも、女性は男性に何も言わず服従するのが当然だと言わんばかりである。

すなわちブリーは、ヴィクトリア朝の、男性が「公の場で活動し、稼ぎ手となるべき」¹⁴存在で「女性は男性に従い、つねに受け身で、控えめで、従順で、自らの意思をもたない」¹⁵というジェンダー・ロール観の持ち主なのである。

4.2.2 フィンの行動、口調

一方、牝馬フィンは同様にナルニア国出身であるものの、強い意志を秘めつつも控えめでおとなしい性質として描かれている。

ブリーたちと出会った当初は、フィンは彼を立派な軍馬として尊敬していたことが窺える。余計な口を聞かないように窘めるアラヴィスに対し、

“No, I won't, Aravis,” said the mare [Hwin] putting her ears back. “This is my escape just as much as yours. And I'm sure a noble war horse like this is not going to betray us. We are trying to escape, to get to Narnia.” (p.31、括弧内筆者)

「いいえ、やめないわよ、アラヴィス」と牝馬（フィン）は耳をうしろにたおしながら言いました。「これはあなただけでなく、わたしにとっての逃亡でもあるのよ。それにこの方のような立派な軍馬さまがわたしたちを裏切るはずはないわ。わたしたち、ナルニア国にむけて逃げておりますのよ」

と言い返し、更に、ブリーに共に逃亡することを提案され、断ろうとするアラヴィスに対し

“Oh do let's. I should feel much more comfortable. We're not even certain of the way. I'm sure a great charger like this knows far more than we do.” (p.33)

「ぜひそうしましょう。そのほうがわたしも安

¹⁴ 川北、op cit. p.202

¹⁵ Ibid.

心ですわ。道もよくわからないし。この方のようなすばらしい軍馬さまであれば、わたしたちよりもはるかになんでもものしりのはずよ」

と発言している。このように、フィン^{Fin}は初対面のブリー^{Bree}を勇ましく立派で気高い軍馬、牡馬として崇拝する様子が描かれている。

その後もフィン^{Fin}は、特にブリー^{Bree}に対しては控えめな存在である。語りでも、“Hwin the mare was rather shy before a great war horse like Bree and said very little.” (p. 45) 「牝馬フィン^{Fin}はブリー^{Bree}のようないさましい軍馬の前ではひかえめで、ほとんど口をききませんでした」とブリー^{Bree}に対して萎縮している様子が窺え、まさにヴィクトリア朝の女性像そのものである。また、彼女に対しては〈謙虚に、控えめに、遠慮がちに〉、を意味する“humbly”という修飾語が2度使用されている。

So it was settled that the Tombs should be their assembly place on the other side of Tashbaan, and everyone felt they were getting on very well till Hwin humbly pointed out that the real problem was not where they should go when they had got through Tashbaan but how they were to get through it. (p.46、傍点筆者)

そういうことで、タシバーンのむこう側で落ち合う場所は古代の王たちの墓地にきました。そしてみんなはなんとなく親しくなったような気がしていました。フィン^{Fin}が遠慮がちに、ほんとうの問題はどこで落ち合うのかではなく、どうやってタシバーンのみやこを通りぬけるかということを描するまでは。

“Well,” said Hwin humbly (she was a very sensible mare), “the main thing is to get there.” (p.48、傍点筆者)

「でも」遠慮がちにフィン^{Fin}は言いました（彼女はとても聡明な馬でした）。「かんじんなのは、むこうに行きつくことでしょう」

また、“‘P-please,’ said Hwin, very shyly” (p. 136) (傍点筆者) 「『お…おねがいですわ』とフィン^{Fin}ははずかしげに言いました」と、おずおずと控えめな話し方を示す修飾語も使われている。

前項で、ラバダシの急襲を伝えようと一刻も早く出発しようと進言したものの、手ひどくブリー^{Bree}に言い負かされたフィン^{Fin}は自分が正しいと思いながらも、その控えめさゆえ、それ以上発言ができなくなる。

To this Hwin made no answer, being, like most highly bred mares, a very nervous and gentle person who was easily put down. (p.136)

これにたいしてフィン^{Fin}はなにもこたえませんでした。よい血統の牝馬はみんなそうなのですが、とても繊細で心やさしく、すぐにやりこめられてしまうのです。

このようにフィン^{Fin}もヴィクトリア朝的女性像を具象化した存在となっている。

5. 『馬と少年』の真のジェンダー・ロール

5.1 フィンのジェンダー・ロール

では、フィン^{Fin}は本当にただ単に、控えめで従順で、自分の考えを持たない牝馬なのであろうか。

フィン^{Fin}が飼い主である貴族の娘アラヴィス^{Aravis}と共に自由の国・祖国ナルニアへの逃避行を企てたきっかけは、アラヴィス^{Aravis}が自身の意に染まない政略結婚を苦に自死を選ぼうとしたときであった。アラヴィス^{Aravis}を思いとどまらせるべく、フィン^{Fin}は誘拐されてカロールメン^{Carrollmen}にやって来て以来初めて人語を話し、アラヴィス^{Aravis}をナルニア国へ逃亡しようと説得する。

“‘O my mistress,’ answered the mare, ‘if you were in Narnia you would be happy, for in that land no maiden is forced to marry against her will.’” (p.59)

「『おお、姫さま』と牝馬はこたえました。『もしあなたがナルニア国にいらっしゃったら、どんなにお幸せなことか。かの国では、おとめがしたくない結婚を無理強いされることはありませんもの』」

フィンアラヴィスに、自由の国ナルニアであれば少女がその意思に背いた結婚を強いられることがないと告げている。すなわちフィンには女性にも意思があり、その意思を曲げるよう強制することはあってはならないと考えている。

また、4.2.1でも取り上げたが、逃亡の旅を共にすることに決めた2頭の馬と少年少女の一行は、どうやって首都タシバーンを通過するかの話し合いを行う場面がある。〈結果〉ばかり求めて無事通過した後の落ち合う場所を決めるブリーと少年少女に、控えめではあるものの問題の本質はどのように通過するのかの〈手段〉を決めることであることを指摘している。

... till Hwin humbly pointed out that the real problem was not where they should go when they had got through Tashbaan but how they were to get through it. (p.46、傍点筆者)

〔前略〕フィンが遠慮がちに、ほんとうの問題はどこで落ち合うのかではなく、どうやってタシバーンのみやこを通りぬけるかということを指摘するまでは。

同様に4.2.1で取り上げた、みすばらしい姿に扮してタシバーンを通過する案をプライドの高いブリーに否定されたシーンでも、“‘Well,’ said Hwin humbly (she was a very sensible mare), ‘the main thing is to get there.’” (p.48、傍点筆者)「『でも』遠慮がちにフィンは言いました(彼女はとても聡明な馬でした)。『かんじんなのは、むこうに行きつくことでしょう』」と、問題の本質を突いた受け答えをしており、そのような彼女はsensible、すなわち聡明で分別があると語られている。

前項でも慇懃無礼なブリーに言い負かされるフィンについて取り上げた。フィンが何か正論を発する度にブリーに否定され、言い負かされる。しかしそれでもフィンは自分が正しいと思うことを発言し続ける。決して彼女はただの従順でおとなしく、自分の考えを持たず男性の言うことに黙って従う女性で

はない。何度言い負かされても信念を曲げず、皆を正しい方向に導こうと懸命に勇気を出して発言し続ける。

発言だけではなく、彼女の身体能力も牡馬に負けていない。体力的には牡馬で軍馬のブリーにやや劣るものの、

The two horses and two riders were galloping neck to neck and knee to knee just as if they were in a race. Indeed Bree said (afterward) that a finer race had never been seen in Calormen. (p.29)

二頭の馬とふたりの乗り手は首と首、ひざとひざをこすりそうになりながら、まるでレースのようなスピードで走りぬけました。じつのところ、ブリーはこれがカロールメンで最高のレースだったと(ずいぶんたってから)言いました。

と走力に関しては負けていない。また、隷属から解放され自分が一行を率いているつもりのブリーが慢心し手を抜く一方、フィンは“‘It was really Hwin, though she was the weaker and more tired of the two, who set the who set the pace.’” (p. 137)「じっさいには、二頭の馬のうち、より疲れている方のフィンがみんなの先導役をつとめていました」と体力を消耗しているのにも関わらず少年少女達を導く責任感を黙々と果たそうと努力する姿が語られている。

物語の終盤、安全な場所であるアーケンランド国の南の国境に住む隠者の家に匿われる頃には、ブリーに対する遠慮も消える。ようやく祖国ナルニアに戻れるようになったにも関わらず、扮装のために不揃いになった尻尾をひどく気にして出発をためらうブリーを、フィンは笑い飛ばす。

Hwin broke out into a horse-laugh. “It’s your tail, Bree! I see it all now. You want to wait till your tail’s grown again! And we don’t even know if tails are worn long in Narnia. Really, Bree, you’re as vain as that Tarkheena in Tashbaan!” (p. 199)

フィンは、思わず馬鹿笑いをしました。「しっぽね、ブリー！ようやくわかったわ。しっぽが元どおりになるまで待ちたいのね！わたしたち、ナ

ルニア国でみんながしっぽを長くしているかどうかすら知らないのに。ほんとに、あなたはタシバーンで会ったあのタルキーナと同じくらいひどい見栄っぱりね！」

常にブリーに言い負かされていたフィンが、ブリーの無意味なプライドの高さを指摘し、タシバーンで出会った、衣装やパーティーなどにしか興味が無いアラヴィスの友人になぞらえ笑い飛ばすまでになっている。つまり、ヴィクトリア朝の女性の役割を打ち破り、男性と対等な立場に立った発言をするようになったのである。

5.2 アスランの行動

5.2.1 対ブリー

ナルニア世界の創造主であり、ナルニア国・アーケンランド国住人の崇拝の対象となっているアスランがブリーとフィンの前に姿を現すのは、前項の隠者の家でのことである。ブリーは、幼少の頃ナルニア国に居た頃の記憶から、会話の端々に “By the Lion’s Mane” や “By the Lion” など、ライオン（＝アスラン）に誓う言葉が出る。それをアラヴィスに指摘されるが、ブリー自身はアスランがライオンであると信じておらず、あくまでもアスランは人間で、ライオンに例えられる程勇猛な存在なのだと思っている。

果たして、そのブリー達の前にアスランが登場する。アスランは本当にライオンであり、ブリーたちと同じ〈けもの〉である。ブリーは大層驚き、パニックに陥る。

“Now, Bree,” he [Aslan] said, “you poor, proud, frightened Horse, draw near. Nearer still, my son. Do not dare not to dare. Touch me. Smell me. Here are my paws, here is my tail, these are my whiskers. I am a true Beast.” (p.203、括弧内筆者)

「では、ブリー」彼（アスラン）は言いました。

「あわれな、プライドのかたまりの、おびえた馬よ、近くによりなさい。もっと近くに、むすこよ。おそれることをおそれるな。わたしに触れなさい。わたしの匂いをかぎなさい。これがわたしの足、これがわたしのしっぽ、これがわたしのヒゲ。わ

たしはまことに〈けもの〉なのだよ」

アスランはこれまで虚勢を張り、男らしく、軍馬らしく振舞っていたブリーのプライドの高さ、弱さを指摘し、彼の思い込みを糺す。ブリーはそれまでもシヤスタの勇敢な行動に対し自己保身に走った自分を大きく恥じており、その後はそれまでの傲慢な発言は影を潜める。

5.2.2 対フィン

一方、フィンアスランを見て、その姿に圧倒され震えながらも勇気を振り絞って近寄り、声をかける。

Then Hwin, though shaking all over, gave a strange little neigh and trotted across to the Lion.

“Please,” she said, “you’re so beautiful. You may eat me if you like. I’d sooner be eaten by you than fed by anyone else.”

“Dearest daughter,” said Aslan, planting a lion’s kiss on her twitching, velvet nose, “I knew you would not be long in coming to me. Joy shall be yours.”

(p. 200-201)

するとフィンは、全身をがたがたとふるわせながらも、今まで聞いたことがないようないなきをちいさくあげ、ライオンにむかって小走りにかけよりました。

「おねがいですわ」彼女は言いました。「あなたはなんて美しいのでしょうか。あなたが望むのなら、よろこんでわたしを食べてください。ほかのどれかの餌食となってしまうくらいなら、いつそあなたに食べられてしまうほうがどんなにいいか」

「いとしむすめよ」アスランは彼女のひくひくしたなめらかな鼻にライオンの接吻をさずけながらいいました。「おまえがここに来るのに、そう時間はかからないと思っておったよ。よろこびあれ」

フィンはアスランに心からの崇拝の意思を示し、アスランはそれを受け入れ、接吻と祝福を与える。フィンのこれまでの控えめで献身的な振る舞いが報われた瞬間である。

5.2.3 対人間

アスランは人間にも愛情と、彼らの行動に相応しい報いと罰を与える。少女アラヴィスはライオンに襲われ背中に大怪我を負うが、そのライオンは実はアスランであった。

アラヴィスは逃亡するために、父と継母によって監視役としてつけられた侍女を薬で眠らせた。その為、アラヴィスの逃亡が発覚したあと侍女は鞭打ちの罰を受けていた。アスランは、アラヴィスが自分の身勝手な行いの所為で他者が傷つけられたことを反省させ、その痛みを思い知らせるべく、彼女に鞭で打たれたのと同様の傷を与えたのである。

(p.201-202)

一方、カロールメン国のラバダシ王子は、自らの身勝手な思いで軍勢を率い、罪のない隣国に攻め入った。迎え撃ったアーケンランド・ナルニア連合軍に壊滅的に敗北し、身柄を拘束された後も反省の色は一切見せず、解放の条件が出されようとしてもひどい悪態をつき暴れ続ける。アスランが目の前に現れ、プライドや怒りを棄て、アーケンランド国・ナルニア国側の慈悲を受けるように諭すが、まったく聞く耳を持つとうとしないどころか、アスランを〈悪魔〉と呼ぶ。まったく改心しようとしないうラバダシに対し、とうとうアスランは罰を下す。高慢なラバダシは口も聞けないロバに変えられ、皆に笑われる姿になってしまったのだ。(p.214-219)

アスランはアラヴィスに痛みを与えたが、それは彼女の今後の成長の糧となる導きである。そしてラバダシのように罪を犯した者に対しても十分に改心の機会を与えるが、それでも尚改めない者には容赦なく罰を与えている。

5.2.4 アスランの行動に見るジェンダー・ロール観

アスランの行動を通して言えることは、彼は性別関係なく公平に賞罰を与えていることである。男性だから厳しい対応をしたり、女性だから対応が甘くなるということはない。ましてや、女性が女性らしい役割を、もしくは男性が男性らしい役割をすべきだという理由で賞罰を与えることもない。あくまでも個人個人の資質や行動に合わせた報いや罰を与えているのである。フィンとは馬だから優しい言葉をかけられ接吻と祝福が与えられたのではなく、彼女

の行動が賞賛を受けるに値するからである。アラヴィスは少女だからと言って大目に見られることはなく、自分のせいで傷ついた侍女と同じ身体の痛みを与えられた。ブリーは牡馬だからその振る舞いを咎められたのではなく、彼のプライドの高さが彼の為にならないからである。そしてラバダシは男性である為にロバに変えられたのではなく、彼自身の振る舞いや無反省で慈悲を受け入れない不遜な態度が招いた結末である。

このように、アスランの行動は相手の性別に左右されているのではなく、あくまでも本人の振る舞いや更生の余地を考慮して決められていることが判る。

6. まとめ — ルイスのジェンダー・ロール観

これまで見てきた通り、『馬と少年』Non-Human Charactersの行動は、ヴィクトリア朝のジェンダー・ロールに影響されているような印象を一旦は受ける。しかし、ルイスがすなわち偏ったジェンダー観を持ち、ブルマンらが批判するように男尊女卑的思想を持っていたと判断するのは早計である。

フィンとは決して男性に対して従順なだけの存在ではなく、自分の考えを持ち、そして必要なときには自分が周囲をリードする強い責任感を持った女性である。つまり彼女は、ヴィクトリア朝のジェンダー・ロールの枠組みから飛び出た、ルイスの時代からすれば先進的な女性像だと言える。

牡馬のブリーには元軍馬という経験や体力を、そして牝馬フィンには聡明さ、思慮深さをルイスは与えた。つまりルイスは男女が対等に、且つお互いを補い合えるように異なった特質を与えているのである。これこそがルイスが考えるジェンダー・ロールであり、片方の性がもう一方より優越するという思想ではなく、互いが支え合えるような設定になっている。従って、ルイスは決して女性を蔑視しておらず、むしろ開明的なジェンダー観の持ち主なのである。

(Received: January 22, 2015)

(Issued in internet Edition: February 6, 2015)